



Title	ひとづくり×地域づくり=素敵な未来！ : 泰阜村・グリーンウッド自然体験教育センターの人間形成作用
Author(s)	辻, 英之; Tsuji, Hideyuki
Citation	社会教育研究, 39, 17-34
Issue Date	2022-03-25
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/84726">https://hdl.handle.net/2115/84726</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	003-0913-0373-39.pdf



【寄稿】

ひとづくり×地域づくり＝素敵な未来！  
—泰阜村・グリーンウッド自然体験教育センターの人間形成作用—

辻 英 之\*

今年度はあと 2 週間で終わる、つまり 1 年間の最後を締めくくる時期です<sup>1</sup>。基本的に都市部から集まって共同生活をしているので、ハイリスクな集団ですから、今年はいへんでした。泰阜村という小さな村の中で、コロナに対する恐怖など、住民の理解を得られにくい取り組みは、今年断念せざるを得ませんでした。

このような山の中で、今年ほぼすべての大学の授業がオンラインとなりました。今日も弱いと思うのですが、Wi-Fi は絶望的に弱いのです。ところが、山の情景や、おじいさんおばあさん、子どもたちの息遣いのようなものを、ある意味リアルにつたえられるということで、学生の皆さんには非常に好評でした。立教大学などで非常勤講師として授業しています。北大などにも特別講義で呼ばれてうれしく思っていたのですが、このコロナで行けませんでした。私はグリーンウッドという団体の代表理事です。代表理事になってからは 11 年です。北陸の福井という豪雪地帯で生まれました。昔はものすごく雪が降り、2m とか当たり前の世界です。毎日雪かきで、もう雪は見るのも嫌だったのですが、自然に憧れがあり北大に進学しました。大学卒業後に、長野県に行きました。どちらかというとも寒い土地で過ごしていますね。

大学時代の話をするとうるせくなりますが、私も一応教育学部の社会教育ゼミに 1 年間所属していました。最終的には体育方法ゼミで卒業します。宮崎先生がまだまだ若い時です。山田定市先生や鈴木敏正先生が現役のころ、資本論などを読まされて徹底的にしごかれました。私はここにきて 28 年になります。社会教育や身体教育、もちろん地域のことや自然に興味があったので、教員を目指してはいたのですが、教員になる前に 2 年間くらい学校以外の学びの場で研修しようと思いました。たまたま見つけたのが今の職場です。こっちの方が面白いかなということで、以来 28 年です。ここ最近 10 年くらいは、今の実践が大学生の学びなるのではないかとということで、いくつかの大学にお声かけして頂きました。そのうちの 하나가九大で、ゲストで呼ばれたり集中講義を受け持ったりもしています。

---

\* NPO 法人・グリーンウッド自然体験教育センター・代表

---

<sup>1</sup> 本稿は 2021 年 3 月 1 日に開催された北海道大学・九州大学の院生を中心とする社会教育研究会における講演記録である。当日はスライドを用いて説明されたが、本稿ではスライドは割愛した。

今日はちょっと地域の方に特化して話してくれと言われてますから、子どもの学びは置いて、もし興味があれば後程また聞いてください。

わが村はこれで「(泰阜村) やすおかむら」と読みます。読めませんよね。これは難読市村。今で人口 1550 人くらいです。減り方は鈍化しているのですが、なぜ減っているのかは後から話をします。長野県の一番南に位置して、南アルプスがどーんと邪魔をしているので東京まで5時間かかっちゃう。たぶん、東京を起点にすれば、みなさんの方が近いですね。

簡単に言うと何も無い村ですね。山岳地帯なんで耕作可能な地域が少ないので、年貢がお米じゃなかった。木を納めていました。だから、江戸城、皇居の梁とか柱はほとんど伊那谷(いなだに)とか、木曾谷(きそだに)と呼ばれているところの木です。あの時代で米が作れなかったということは、貧しいということです。国の政策のしわ寄せがくるという地域。例えば満州開拓の歴史です。長野県はたくさんのお人を送り出しています。わが村は今は過疎ですが、昔、過密に悩んでいました。5800人の人口があったのですが、その人口を賄うほどの食糧を生産できない。という意味で、過密。口減らしなどもよく行われていたと聞いています。

だから国の政策、いわゆる満州事変の侵略ですが、それに乗かってしまった。人口の三分の一くらいが渡りまして、みんな帰ってこなかったという非常に悲しい歴史です。引き上げの方もいます。私の次男のクラスメートも帰国者で、PTAの方も中国の人が一定数います。

植林や原反(げんたん)、最近では自治体合併など、我々は自立を選びましたが、国策のしわ寄せがくるのが小さな地域の宿命です。実質公債費率という指標が全自治体のワースト10に入っていた。苦しい状況でした。今、泰阜村は好転してベストから数えたほうが早くなりました。こんな地域なので、ここにも駄目だからどんどん都会に出なさいということになり、結果的に地域が持続不可能になっていくという、ある意味典型的な山村です。

こういう地域に、私の先輩の梶さんという福島出身の女性が、こういう環境こそ子どもの教育にいいだろう、と始めたのが山村留学です。基本的には小中学校の子ども減少を防ぐために、手っ取り早く東京から人を集めるというような移住政策です。だから自治体が予算をつぎ込みます。我々の場合は、民間でこういう教育をやりたいって始まっていますので、そもそもの土台が違います。我々は、泰阜村の過疎をどうにかしようとして始めたわけではありません。だから、予算をかけずに勝手に子どもを集めてくれるということで、小さな地自体は誘致合戦になります。たまたま泰阜になったのです。泰阜村も行政は歓迎でしたし。しかし住民は、「来たら困る」と反発するわけです。一番反対していた人とは、今は仲良くなりよく飲みますけどね。

戸塚ヨットスクールなどの事件もあり、怪しいと思われていました。「なぜ、嫌だと住民が思うところにわざわざ来るの？」と。NPOという言葉がない時代なので、我々が一体どういう目的でやっているのかなど我々を形容できる言葉がない。だから「怪しい」に結びついてしまいます。森でも食べ

れない、田んぼでも食べれない、という人たちにむかって、「自然で飯食えますよ」「教育で頑張ります」という我々のことを、「気が変か？」みたいに思ったのでしょう。「絶対無理」「遊んでいるやつらだ」みたいなことを言われたのが、35年くらい前の話です。

今2021年は17人ほど応雇用しています。この村では大企業です。人口の1パーセント以上雇用していて、みんなUターンで若者。そして、自然を資本として産業を成立させた。その中身は、地域の営みとか自然とか暮らしなどを「教育商品」にしたということです。キャンプや山村留学です。そうするとね、「どうせだめだ」とか、「こんな村いやだ」と言っていた住民たちが、「わしにも出来るかもしれない」と様々な動きを始めていきます。そうするとUターンが増えてくる。若者が増え始めるのです。村自体が図らずも持った戦略で、観光客を集めるところに力をかけるよりも、一人でもいいから一生つきあってくれるファンを増やすという戦い方ですね。その真ん中に、学び、教育とか、学習とかってというのが位置づいている、というのが私の持論です。

グリーンウッドが目指す社会：ビジョンは、「あんじゃね」な社会です。方言で「案ずることはない」「安心しなさい」という意味です。平和な社会を目指しましょうということです。そしてミッションは、これも方言で「ひとねる」です。「人にしていく」という意味です。平和な社会に向かって、人づくりをする。そして大事にする考え方・アクションが、ヨーロッパや東京から一足飛びに人を輸入していくばかりじゃなくて、地域のことを大事にした教育活動をしていきましょう、ということです。

35年の実践がもたらす地域への波及効果ですが、まずあれだけ「嫌だ嫌だ」と言っていた村の方々が、「この村でもいいよね」と考え方が変わっていきます。村の一番奥の集落に住んでいる木下さんというおじいさん。もう80才くらいですが、今でも僕と一緒に東京まで一緒に行き、立教大学までゲストで話しています。今年はオンライン授業もやってきました。

20年くらい前に当時の文部省に「生きる力」の育成のため地域全体で長いキャンプをやりましょうという施策があって、泰阜村が手を挙げました。僕らみたいなプロ集団もいました。ただ、まだ怪しまれていた時代なので、「なんでグリーンウッドのやつらなんかとやんなきゃならないの？」と、地域の皆さんに想われていました。その状況で一緒に半年くらい仕事をして、理解が深まってきました。

子どもをバスで見送るときに木下さんがつぶやきました。「わしゃ、生まれ変わったら教師になるわ」と。僕は感動して「なんで？」って聞いたら、「いや、その、来る子どもがまあ、一緒にキャンプしたりホームステイしたりして、流れている川がね、『おじいさん、底まで透き通って綺麗に見える』『こんな星空見たことない』とかね」。

木下さんが、鉈を研ぐとか縄を編むとか、全てにおいて子どもが「すごい、魔法の手みたい」と驚いて、肯定します。「良い！」「すごい！」と。

「辻くん、わしなあ、この村のいいことを、何にも、自分の息子とか地元の子に教えてこなかった。

だめだだめだばかり、ずーっと言い続けてきた。だから、生まれ変わったら先生になって、この村のいいこと、いっぱい教えてやるんだ」と言いました。60才くらいだったので「まだ生まれ変わるの、早いでしょ」ということで、それからは村の青少年の活動に、先陣を切ってくれています。

戦後75年、日本は欧米に追い付け追い越せだった。山村からすれば、都会に追いつけ追い越せだった。便利になることが豊かさだと思ったのです。そして結果的に村のいいことも全部否定していく。「こんな村じゃだめだ」、「なんにも出世なんかできん」と。それを聞き続けた子どもたちは、やっぱり村に残るわけがありません。「村を捨てる教育」を受け続けてたことに気づいていきます。「薄々分かってたんだけど」という想いが。それが都会の子どもとか、我々ヨソモノとの出会いとか学び合いによって、「やっぱりそうだよ」と、この村の価値を見つめなおしていきます。そうすると、自分たちでかなえて動く活動が始まります。

この村の人たちは、自分で自分の地域の未来を決める営みを「取り戻した」のです。国のせいにしてたり、ないものねだりとかしていたことを、見つめなおした。やっぱり自分の未来を決めた方がおもしろい。それが教育なんだなと思ったのでしょうか。

NPOの経営の一つでもあり中心でもある山賊キャンプ。1年間の子どものキャンプの3日から1週間バージョンです。これが大人気で、1000人のこどもが集う日本でも有数のキャンプです。こどものサポートに大学生など400人ほど、全国から集まります。それが大学の単位になっていたりもします。僕が村に行ったのが93年。「生まれ変わったら教師になる」と言った木下さん達が一緒にやったのが99年。この辺りがターニングポイントだと思っています。地域住民の理解が進み、距離が縮まって一緒に仕事ができるようになった。それはつまり、住民の持つ、色々な教育の教育力や営みが、キャンプとか山村留学に反映されていくということ意味します。キャパシティを増やせば、つまりキャンプ場やコース数を増やせば、子どもの参加人数は増えていきます。一番変わったのは、若者たちの参加人数が安定し始めたことです。ボランティアはキャパシティを増やしても増えない。バイトなら別だけ。ですが、見てわかる通り、99年くらいから安定します。

仮説的に思うのは、地域の教育力をきちんと教育に反映したときに子どもに伝わるより深く、ダイレクトに、若者たちに伝わったのではないかと。夏のキャンプにこどもたちが食べる野菜の量は莫大で、農家のみなさんに作ってもらうことにしたのも2000年くらいです。朝、運ばれてく大量の野菜が、きれいさっぱり子どもの胃袋に消えます。夕方に「おばちゃん、ありがとう。おいしかった」なんて言われたものなら、やっぱりやる気になります。「もっといい野菜作ろう」と、農薬を減らしたり、有機野菜にするなど、安全な野菜づくりに移行します。僕らもそっちの志向があります。「農薬使う野菜よりも、別に穴が開いていいから、あんま使わんでほしいよ、子どもにあげるからね」と。安心安全の野菜を使う教育のほうが、保護者にとっても嬉しい。

そうなると、やる気になった農家が組合を作って、村の小中学校の給食も「全部自分たちでやる」

とやり始めます。考えられなかったことです、自分たちでこうして動きを起こしていくというのは。農家のおばあちゃんは、野菜を作ることが子どもの学びに資するということに、やればやるほど子どもたちが喜んでいい学びができるということ、学習していきます。僕らも、まさかそうなるとは思っていません。仕組みだけそろえてもこうはならない。僕たちが仕掛けたというより、この村の価値がもう一度見直されたという、住民のみなさんが自己学習を重ねたということだと思います。

遊んでいる奴らだと言われ続け、今もそうなんだけど、遊びを仕事にしているんだけど。これがうちのスタッフです。陶芸家が二人と研修生も二人います。創設者も女性ですし、女性が多い職場です。泰阜村の予算規模は20億円くらいで、地方交付税でまわすしかない典型的な山村です。我々はこの村で、民間として1億円稼いでいますので、優秀な大企業です。内訳もNPOとしては健全です。自分たちで稼ぐ自主財源が8割超えています。今年はコロナで駄目ですが。補助金を極力少なくして「よくやってるね」と言われます。内訳は、山村留学が一人100万換算として20人ほどいますので、約2000万円。キャンプが単純に単価3万円から4万円で、1200-1300人来ると思えば4500万円。講演など他事業で1000万から1500万円。他に、国や県などの補助金や助成金とかの他財源が2000万円くらい。自主財源と他財源の割合を7から8対2から2.つまり自分たちで稼ぐ財源をなるべく7から8割にし続けてきたのが、我々の経営戦略の一つです。補助金とかに頼りすぎないようにしてきたということです。今年この山賊キャンプを失いました。家計の半分を失うに等しいので、大変です。

次は支出です。7000万円から8000万円、つまり7割から8割が地域内に落ちるようにしています。我々が直接雇用する人間は17から18人。僕らが頑張れば頑張るほど周りに雇用がつくられるようにしています。農家もそうだし隣接する宿舎などの従業員もです。我々が宿舎を運営するという手もあります。なぜかといえどひとづくりというミッションから離れてしまうからです。運営すればお金が入るのは分かっていますが、ミッションを達成する戦力を固めるために、やらないのです。産業化っていうのは、我々が肥大化していく、儲かるということではありません。我々が頑張れば頑張るほど周りに雇用もやりがいも生まれて良くなっていく、ということです。周りが頑張れば頑張るほど、我々の教育の質が上がっていくという循環を意味していると、勝手に僕は定義しています。頑張れば頑張るほど、周りに、お金もですが、やりがいや生き甲斐が落ちていく。

得意技で、みんなで回っていくっていう。小さいマスなんです。産業って、ないんですこの村。だけど、小さいユニットなんだけど、こういう風に動かしていくことが、いわゆるミニマムな地域産業なんだなって思うんです。

次に、自律的に動き出す人たちです。「こんな村はだめだ」と言い続けていた人たちが、自分たちでやれるかもしれない、と様々なことをやり始めます。長野県は公民館の活動が強く、自分たちで何かやったりとか、学ぼうという意識が強かった。今までそれを放棄してただけだと思います。老

人たちがグリーンツーリズムの団体立ち上げて「大人対象は俺たちに任せろ」みたいに事業を始めます。農家の女性は組合を作って食のコンテストに挑戦し、ほうれん草が全国3位でした。本当に住民が自分から動き始めます。「村なんでもやるぞ会（村づくりやらまい会）」、農家レストラン、若者による大規模農業、若い女猟師による獣害対策で企業など。地域が元気になっていきます。

特筆すべきは、村の子どもたちの週末の体験活動を地域の大人が支えましょう、そしてそれを通して大人が学ぶ会というのを立ち上げて、もう14年続けていることです。「あんじゃね支援学校」といいます。あれほど「この村だめだ」とか言っていた人がみんな集まってきて。「村の子どもにこういうこと残してやりたいよね」とか言ってあーでもないこーでもないと意見を交わす。3ヵ月に一度くらい集まります。「なにも教えていなかったな子どもたちに」という反省から始まり、回を重ねるうちに「これやってみようか」「読み聞かせ、村の物語を聞かせたらどうだ」とか、保育園の先生に「山の中に連れていったらいいぞー」とかね。

面白いのは、この場がある意味政策決定の場に近い形になっていること。副村長とか議長とかもいるので、みんなで学び合いながら「これいいな、あれいいな」と思ったら、よーし、じゃ次の議会で提案してくださいよ」と言うと議員が「よっしゃあ分かった」となる。だから、自分たちが参画しながら子どもの政策を立案するような場にもなり始めているという意味では、とても面白い取り組みだと思います。

村の人々が横に手をつなぐと、今度は縦のつながり、つまりもっと様々な年齢対象の子どもたちに体験させてやろうということになります。村の保育園児を森に連れて行く。「危ない危ない」と言われて連れて行かなかった先生たちですが、行ったら子どもが変わるから今はどンドン森に入っています。今、森の幼稚園と言われている活動を、もう十数年やってきています。

あれこれ文句を言い始める中学生たちを、天竜川に連れて行く。この村で育った子どもたちが、この村の山とか川で遊んだことが無い。「危ない」と言われて。遊び方も分かっていない。それを正規の授業の一部にしていきます。小学校4年生になったらこの川、5年生はこの森、6年生になったらお泊り、中学校になったら大きい天竜川などと。

あたりまえのことですが、村には高校、大学がありません。15・6歳から22・3歳までのこの階層の青年がいない村で、子どもの育ちとしてはいびつです。そこで、村の近くにある高校に声をかけた地元短大の学生に来てもらい、常に高校生も大学生もいるような環境を創る。彼らに学びを提供しながら、村の子どもたちと接してもらおうということを考えてやっています。

Uターンで戻ってきた20代の若者たちが、昔遊んでいた外遊びを教えてください。30-40代の方は「この村はだめだ」と徹底的に言われ続けた階層なので、自然で遊ぶことの何がおもしろいか分からない、みんなパチンコやっています。親子プログラムを多用するとようやく出てくるようになってきました。お父さんお母さんが「こうやって昔はなあ」なんて言い始める。50代から上は、どちら

かという講師陣という形になります。これで、色んな階層が子どもたちを中心にしてお関わらるでしょう。そうやって健全な育ちと学びが生まれると思います。今までは、それができていなかった。

週末の体験活動だけではなく、放課後の学童保育もやっています。家に帰ると、自分しかこの集落に子どもがいないという、そういう地域ばかりです。だから遊び相手がないので、時間も空間もあるけど仲間がいない。だから、学校から家に帰るまでが勝負なので、ここで我々の理念をきちっと使います。ただ単に預かるのではなくて、集落のお寺に行ったり、山に行ったり川に行ったりします。今年はコロナで、山賊キャンプも全面中止ですから、うちのスタッフは全勢力を村の子どもたちと向き合っていました。

こういう取り組みが高い評価を受け、表彰されます。僕も東京に木下座長と一緒に行きました。すると、またやる気になります。「またワシやらないかな」と。

このような地域全体の底力を反映した教育を、差別や貧困など困難を抱えている子どもたちにこそ提供したいと思い、被災地の子どもたちに支援を行い続けています。東日本大震災の再、福島から放射能から逃れている子どもを50人ずつ招待しました。山村留学にも5年間預かりました。泰阜村が予算措置をとり、全国から寄付金を募って、住民はできるところでサポート。みんなで得意技のなかでやっていくという仕組みが少しずつ作られてきました。5年間で支援に区切りをつけました。2016年に熊本地震が起り、今度は熊本の子どもの招待し続けてきました。熊本の子を呼ぶキャンプに、今度は福島の子どもたちが、もう大学生や社会人なっていますので、ボランティアリーダーとして参加してきます。学びを真ん中に置いて、支え合いの循環が起こっています。

Uターンが増えていきます。2年前のデータですが、この7年で114人というのはこの村にとってはすごく大きい数字です。役場も一気に若返って驚いています。もう15年前に僕と一緒に山の中で遊んでいた子どもたちが、役場職員になっています。

もうひとつ仮説的に思うことがあります。山村留学で1年2年過ごした都市部の子どもにどのような学びがあるか、とらえやすいかもしれない。もしかすると、一緒に机を並べた村の子どもたちにとっても、実はこの地域をきちんと見つめていく、何かのきっかけになったり、効果があったのではないかと仮説です。

スタッフも、当然17人全員がこの村の住民票を持って、過ごしています。私も3人子どもがいて、社会人、大学二年生、一番下が高校三年生です。そんなに収入はないけども、こどもたちを大学に行かせることが可能なほど、生きていけている、ということです。

Sターンという現象が起こっています。私が造った言葉ですが、山村留学の卒業生が村に帰ってきて定住することを意味しています。こういう事例が、今増え始めています。35年やると。もう4組くらいまで増えています。1人は集落支援員として限界集落に入っていきます。そこで結婚して子どもも3人生まれました。だから、限界集落じゃなくなるわけです、定義上。その言葉だけ見たらすごい

ですよ。『限界集落が消滅した村』なので、一体何が起こったんだと思います。もう一人は介護福祉士です。この村は在宅福祉、とりわけ医療福祉との融合政策を先進的に40年以上進めてきた村です。なのでそういう資格を持っている卒業生が帰ってくると、みんなから喜ばれます。

次に、2年前にうちのスタッフが結婚したのですが、その相手が卒業生です。村の人たちからみたら「お、戻ってきたか」という感じです。Uターンに近い。卒業生にとっても、友達もいるし知り合いもいて、身元保証人もいるので、悪いことをしないし、できない。だから、村にとっても安心な移住者です。

こうなることは想定はしていませんでした。ただ、言えることがあります。泰阜村の人々が進めてきた山村留学は、小中学生の子どもの減少を、てっとりばやく東京から補填するという政策ではなく、実はこの村の学びを一年間、二年間しっかり提供すれば、15年後、20年後に、子育て層として帰ってくるという息の長い学びの政策だということに、住民自身が気づいていきます。「やってよかったな」と、今更言い始めて(笑)。すると、今いる山村留学の子どもたちに、いい学びを、いい経験をさせようと、頑張るわけです。この村独自の、オリジナルな学びを頑張ろうとするわけです。とても良い流れになり始めています。

この村で生まれた子どもたちもいれば、Uターンもいれば、Iターンもいれば、Sターンもいて。若者が多い村になってきました。こんな小さい村の保育園に、待機児童が出始めました。考えられないことです。つまり若者の層が増え始めているということです。今の小学2年生が一番少ない人数ですが、その後ゆるやかに増加に転じていく予想です。

僕は今泰阜村の総合戦略推進の役割を持っています。刹那的な、一過性的な移住政策ではなく、時間をかけてでもこの村ならではの学び施策につなげていくほうが、結果的には移住にもつながると思います。学びを重視する村です。中心政策を学びの方に移すことが、私の役割です。長野県自体も、知事が「学びと自治の県づくり」というの打ち出しています。自治体の政策軸と合わせていくということです。そういう政策にもコミットするという立場にいいよなってきたんだな、と想います。

(質問) 若者が増えたのは、やはり、さっき言われていたSターンの影響ってことで理解していいんですか？

辻：それだけではありません、村の政策体系が、成功し始めていると想っています。在宅福祉政策を40年やっていて、日本一のレベルを誇っていた時もありました。老人の「昼の上で死にたい」という願いを叶えよう、という政策です。

その政策で何が芽生えたかということ、もちろん老人の願いは叶えられたのですが、国民健康保険が安くなりました。終末医療にかかるお金が減ったため掛け金もすごく安い。これは目に見える成果でした。

もうひとつ重要な成果は、この村が政策的に、一人一人の尊厳を最後まで守るという強烈なメッセ

ージを出し続けたということです。住民が「この村は最後まで守ってくれる」という思いを醸成し続けた。これが決定的に大事なんだと想っています。その土台のうえで、例えば僕らが一人一人を大事にするという教育を実践できている。尊い地域の力を感じます。若者が帰ってくるというのも、決してNPOが頑張ったからだけじゃない。おそらくですが、僕たちの活動を価値あるものとして成立させてきた地域の土台とか、力というのが、今、若者に伝わり始めている。伝えられる人が、まだその当時ははいなくて、僕らが伝えてきたのですが、今は、僕たち以外にもどんどん伝えられる人が増え始めたということなのかなと、勝手に思っています。

(質問) 重ねてお聞きすると、「僕たち以外」っていうのは、グリーンウッドの卒業生とかではないけれども、移住をしてきた人？

辻: そうです。協力隊のように移住をしてきた人もいます。それと、もともとの村民自身でもあります。「あんじゃね自然学校」に参加した子ども、つまり僕と山の中で遊んでいた子たちが、教育委員会の主事をやったりしている。支援学校には教育委員会を代表してではなく、「OBとして居ます」と参加しています。僕らが生み出した、地域全体が生み出した次の世代の人たちが、僕たちと同じような担い手に、もうすでに成長し始めている。おこがましいようだけど、自分の役割はこの村の青年層たち、特に公共を担う若者たちをどう育てるかとうこと。それはは、NPOだけではなく、住民としてやるべきと強く思っています。

(質問) 1999年のターニングポイントになったという時のお話なんですけれども、木下さんたちが参加するというきっかけと言いますか、1人目2人目ですとかそういった方がいらっしゃったと思うんですが、そういった最初の味方になってくれた人たちはどういう人たちだったのかちょっとお聞きしたく質問させていただきました。

辻: 僕は93年に参加しました。先輩の話では、正直86年の頃は地域の人には10人いれば9人は反対しているという感じです。200人くらいの小さい集落に住んでいて、自分たちの一番近い自治会は理解は少し早かった。特にその、創設者の梶さんがとにかく信頼を得る活動を続けました。地元住民にちゃんと敬意を払い、地域のことを後回しにしなかった。ただ、谷挟んだ別集落とか学区が違くと「怪しい」の大合唱でした。普段会わないので、理解を得るといって土台を創れない。学校の先生たちがまず我々のことを信頼しません。「お前らが教育なんて言うな」という雰囲気でした。PTAの人たちも都会から変な子どもが来て、物がなくなるとあの子が盗んだとかすぐ言われてしまう雰囲気。やっぱり接点がなかったことが、一番苦しかったです。

僕が来た93年からは、NPO自体の経営が危機的で、何とかしなければならぬ状況でした。ちょうどその時にいた教育委員会の女性の係長さんが強い意志を持った人で、とにかく住民参加の実行委員会をつくる人でした。それによくお誘いがかかり、僕は仲間づくりが少しでき始めた気がします。社

会教育の範疇での地域づくりに、よくわからないままに参加させてもらった。いわゆる子どもの暮らしで向き合う地域住民とは少し別の動線で、地域の若者と接点を持つ。その当時の若者たちが今ずらりと僕たちの応援団になっています。先述の木下さんは、さきほどの係長の女性が強引に実行委員会をつくって、木下さんを実行委員長に仕立て上げたということです。係長は池田真理子さんという当時長野県でも有名な主事さんでした。生涯学習とか社会教育の範疇で、それをどうしても住民参加にしたいんだー！と言い続けてました。そういうリーダーの存在は大事ですね。僕は彼女には感謝しています。

(質問) 99年のターニングポイントのあとで、村の人たちが自立的に動き出して、自分たちでグリーンツーリズム研究会とか、村づくりやらまい会とか始めて行きますよね。辻さんがおっしゃったように、もともと公民館活動があって、自分たちでやる感覚は持ってた人たちで、公民館活動や青年団をはじめみなさんがそういう自治的な感覚を持っていた。ところは、村全体としては元気が出なかった。しかし、グリーンウッドが入った後に、自分たちでも何かできそうだっていうふうに変ったとすれば何が違うのか。仮にグリーンウッドが「こんな風にやればいいんだ」というモデルになったのだとすれば、彼らが求めていたモデルとは何だったのか。逆に言えば、社会教育である壁にぶつかっていたとすれば、その壁は何だったのか。

辻：当時、池田真理子さんたくさん仕掛けた実行委員会があったらしいです。でも、結局同じメンバー、やる気がある人が残ってしまうそうで、広がりが無いという課題にぶち当たってたというのはよく聞きました。そういうときに、私のような訳の分からない移住者が入ってきた。僕たちはどちらかと言えば、村の人たちに理解してほしい、仲良くなりたいというのが動機なので、もう必死です。言われたことは全部やるし、じゃあ私リーダーやりますとか。自分のことは差し置いてでも実行委員会を優先するとか。やろうとすることみんなで時間も心も持ち寄ることを結果的にやってたと思います。実行委員会の目的を達成するために参加しているというより、何とかここで地域の人に理解してほしいという、そのような存在は村の中にはいなかったのだと思います。しかも楽しそうに参加するし、成果も出そうと頑張るといふ、村民からすれば珍しい関わり方をしていた。そうすると、参加してどうなるの？と思っていた人が、参加した方がもしかしたら面白いかもなということに、単に気づいただけだと思います。もとに戻っただけの話かなとも思います。その意味ではおっしゃる通り、僕たちがよそ者だろうが何だろうが、楽しく何か物事に関わっていく、みんなで作り上げるというような関わり方をしていると、村民からは見られていたと思います。

(質問) グリーンウッドは建物も電信柱と丸太で自分たちで作り、自分たちの活動の基盤を他に求めないで全部自分たちで作る、必要なものはみんなで作れば良いというスタイルのように思いますが、それはもしかしたら泰阜村の人みんなもともと持ってたものなのかもしれない。もしもそうだとすれば、自分たちが大事にしていた、みんなでこの村をつくってきた、その原点になるところがグリーン

ウッドの集まりの中に見えて、忘れていたものと呼び覚まされたかのような面があったのかもしれないと思います。

また、村の子どものお話ですが、例えば危険だからと川下りしたことないとか、ところがグリーンウッドのノウハウで関わるができるようになったということは、村の中に色々な要素があるけどバラバラになっていたのに対し、グリーンウッドはその要素をつなぎ合わせシステム化していくノウハウを示したと言える。その二つがモデルという場合の側面かなと思います。

辻：前者はとにかくそうだと思います。山村留学では自給自足的に近い生活をしています。燃料となる間伐材をみんなで採ってきて、倒して割って、五右衛門風呂でもまともに暮らしてる。日々子どもたちが、刃物を研いだり、自然にある程度関わりながら暮らしていきます。この村で一番、この村の子どもらしい生活をしてる、とよく村民に言われます。もうなかなかできないよね、とか、やりたくてもできないね、と最初は懐かしいという思いで言われていました。この10年、15年ぐらいからは、これ大事だよ、と言うように変わってきた。それは今、NPO自体が窮地に立っていますが、村全体でこの学びの場を支えるという姿勢をとっていることからわかります。村民ですら合理化や効率化によって捨て去りつつある、自然と向き合う、地域と向き合う暮らし方自体に、大事なものと想っているのだと思います。

もう一つは、子どもたち含めてうちのスタッフたちが、一人一人の尊厳を守るといような村の土台を、そのまま具現化しているような物事の進め方、みんなで話あって決める合意形成などをちゃんとやる。それもまた、村の人たちですら、当然合理化して捨て去りつつあります。同じくそこにあった大事なものを感じ始めていると思います。

後者の方は、確かにそう言われれば本当にその通りで、遊ぶ場はいくらでもあるし人もそれなりにいる。でも、農家の後継ぎとか、何かの職人の後継ぎがいなくなったというのと同じで、伝え方が分からなくなっている。伝える場がない。そんなことよりも勉強しろとか優先順位が下がります。伝える場や時間はいくらでもあったはずなのに。その証拠に、やっぱり老人に講師で来てもらうと意気揚々として昔の技術を伝えてくれる。場や仕組みが大事で、残念ながら学校がその役割を果たしてこなかったという気はしています。

(質問) 非常に面倒だとか手間かかるとかってきたことは、一見するとその価値が見えにくく、そこに時間なり人を投資していくことの意味が見えづらい。もっと安易な方法があるんならそれに置き換えて合理化したいという思いは、しんどくなればなるほど出てくるわけですよ。その面倒臭いこと、手間がかかることの意味は「教育商品」として都会の人たちに価値を示すと、確かにわかりやすいと思います。その価値は「一人ひとりの尊厳を大事にしながら」と理念と多分関わってると思うんですよ。本当に大切にしようとしたら、システムの中に人をはめ込むんじゃなくて、面倒臭いけど手間をかけて話し合っ、お前どう思うんだっていうことを出し合っ、そしてかたちをつくっていくし

かない。つまり、自分たちが持っていたものがグリーンウッドを媒介にして一つ高いレベルでもう一度かたちをなしていくように見えるんですね。

辻：梶さんも私も、実はこの村の地域をどうするかなどはあまり関係ないまま活動を始めています。子どもたちの自主性とか、自分たちで考えて決めていく自由度の高いキャンプやるために、環境がある山村でということになった。地域性や風土、営みというのを正直あまり考えていなかった。むしろこの地域が持つ土台とか力とか営みというのが、我々の理念をさらに高めていく非常に重要なファクターというか土台だどこかで気づき始めていきます。それが99年の木下さんと連携になって、確信に変わっていったと思います。地域に立脚した教育活動をして、それが地域に波及効果を起こし、さらに教育活動の質が高まる。循環が起こるということが上手く進んだのが一つです。

もう一つあります。2000年前半は自治体合併の時です。我々が浮上するこのタイミングで、この村の住民全体が一回試されました。本当にこのままでいいのか、大きい町に合併した方が楽ではないのか、というのを全員が決断するプロセスを経た。我々は自立を選びました。そもそも自分たちで考えた方が面倒臭いけど良いんだ。合併していたとしたら、合併が悪いとかいうことではなくて、多分ずっと人のせいにしてたり、ないものねだりをずっと続けるそういう姿勢の村になった可能性があります。だから、多分僕らがちょうど99年から2000年前半あたりで、地域の方々と協働し始めたのは、ある意味必然だったのかもしれないと思います。安易な道、楽な道を選ぶのか、それでも苦しくても自分たちで考える道を選ぶのかを、全員が試されたということが、今につながってるのだと思います。

（質問）まず「教育商品」という言葉を辻さんは前はあんまり使ってなかったと思うんですね。なぜその言葉、そのワードを使うようになったのかを聞きたいんですが。その前提として何が価値として対象化されていったのか、そのプロセスを改めて考えたいなというふうに思って聞いていました。私が好きな話は朝仕事なんです。今回、だいだらぼっちのところにあんまりフォーカスが当てられなかったから見えにくいところがあるのですが、もともと野外教育として入ってきた人たちが暮らし、働き方っていうところにシフトしていくのには、だいだらぼっちがあったことが大きかったと思うんです。そこでやってたのは野外教育というよりは、暮らすことですよね。暮らすことに伴って一所懸命命語ることだとか、あるいはその朝仕事みたいな働き方を、だいだらぼっちの教育的価値として位置付けていくというのがあって。それで「あんじゃね」とかも含めて、いろんなとこに波及していつている。自然だけではなくて、暮らし、働き方まるごとを教育的価値として見出していったグリーンウッドの営みがあって。先にモデルと言われたところはそのへんに絡み、それは村人には全くなかった視点だったわけですよね。朝仕事なんてみんなやらなくなってきた。お前らがやるのかというふうに言われたというのを聞いたことがありますけれども。さっきの話も繰り返しになりますが、そういう教育的価値として見出したものを地域の人たちが学び直していくみたいなのが、すごく大事なところだったんじゃないかなと思ったんですが。

私が今地域の価値って言ったことは、一気に「教育商品」っていう言葉にはならないわけですよ。でも辻さんはそこをつないで語られていて、なぜ「教育商品」という言葉でそれを語られるのかっていうところが質問の一つです。

もう一つ伺いたいのは、「あんじゃね」の村だということ、あるいは若者たちが、ここで言ったら大事にされると感じて。でも一方で自治体合併の話があって、村長は「うちは低空飛行の村でいくんだ」って言うてるわけですよ。低空飛行の村に住みたいのかっていう話ですよ。そこにはそれでも選んでくる若者たちの社会像、暮らし・働き像がある……そこに落としどころを見出していったる社会像。その辺を辻さんはどういうふうに思ってるのか。村長はそう言ってるんだけど、我々も低空飛行でいいんだっていうふうに若者たちが思ってるのか、そこ伺いたいと思いました。辻：教育商品というのは、分かりやすく言っただけの話です。最近増えている講演などに、教育の内容に加えて、地域産業とか、中小企業の人たちとかですね。そっちの人たちからのリクエストも少し増えてきてまして。今まで使ってきた言葉が通用しない時があります。村の価値と伝えても「それ儲かるんか」という話になってします。なので、分かりやすくいうとこれ教育商品なんです。と話をしています。残念ながら今年度がコロナで経営が苦しく、何がなんでも若いスタッフの雇用を守るという気負いが、使う言葉を乱暴にしているかもしれません。

後半言われた岡先生の話は本当にその通りです。今日はいだらの子どもの話を省いています。この村が大事にしてきたことを、丁寧に僕なりに文字化する努力をしています。村の人たちと一緒にワークショップで可視化してきたものです。それを丁寧に山村留学とかキャンプに反映しています。あさづくりもそうですし、自分のことは自分で決めるということや、もったいないという精神をどのように暮らしの中に生かすのか。この村が当たり前のようにやってきた、けども村の人たちはそこにあんまり価値を見出そうとしなくなって久しいことに、実はそれは世に問うたら評価されるものなんだということを、丁寧にやってきたんだなと思いました。それは言葉で言えば、村の価値を教育を通して浮き彫りにしたんだと思います。

もう一つはその「低空飛行」の話です。どうしても行政は近道しがります。すぐ効果が出るだろうと勘違いする政策に手を出します。たとえば、結婚祝い金とか出産祝い金を増やせば人口は増えるだろうと。そんなわけないのですが、でも近道の方程式を使いたがります。若者たちが、こんな貧しいというか、まだ未来があるのか分からないけど、こんな村でいいんだと帰ってきます。僕が思うに、前の村長がいみじくも話していましたが「合併を拒否したのは、合併した方がいい地域は合併すればいい。でも、明らかにこの村の場合は飯田市の周辺の一部になってしまう。自分たちの地域のことを決める決定権は遠のいてしまう。どんな形にかたちになっても、その権利は手放してはダメなんだ、近いところに置かなきゃだめなんだ」と。僕はそれにすごく賛同します。合併が反対じゃなくて、合併したっていいから、自分たちのことを決める権利は手放さないようになればいいと。そういう政策の設計になってないから、あのときの自治体合併は拒否した。それを村民が支持した歴史があ

って、おそらくその頃子どもだった若者たち、今の20歳から30歳ぐらいの若者たちが、その決断を垣間見てる時期だったし、僕らも彼らの学びを支えていた。だから、小さくても弱くても、自分たちの地域のことを考えられて決められるということが、実は幸せなことなんだと感じてると思います。

(質問) : 「教育商品」についてはごめんなさい。今、修学旅行を産業化したりだとか、教育商品って言葉を別の企業も使っていて、それに対抗する活動でもあるというふうに思うので、多分その言葉の使い方はなかなかせめぎ合いがあって面白いところだなというふうに思いました。ありがとうございました。

(質問) 漠然とした感想になるんですが、教育商品って言葉に引っ張られて理解をしていて、そこで感想をちょっとしゃべらせてください。地域の子どもたちがいて、保護者とか地域の大人がいて、その地域の中で教育が完結するっていうのが自然な教育のあり方ですよ。地元の子どもが地元の学校に通って育っていきっていくというのが、自然な、本来的なあり方で、それに対してこのグリーンウッドであると、村に外の子が来る、外の子を育てている。あるいは、都市の大人から見たら、子どもを外で育てる、アウトソースする、外注するような感じになるわけですよ。そこが自然か不自然かという不自然であり、いびつなかたちが一瞬生まれている。ただその形は村にとってみたら、教育の需要を外から持ってきて、中の潜在的な教育の供給力を高めさせるというか、そういうことにつながったのかなというふうにしてみました。というのもそれまでは、村の地元の子どもたちも地元の自然の教育的な力を知らない、要は村の中の川で遊んでないとか、山まで入ってないとかっていう状態があったけども、外の子が来て、教育力を引き出すことによって地元の子たちにも還元されていくという意味では教育力の供給力が高まった。そういうプロセスを経て地域の子どもも育てるような、地元の中の教育を計画し、組織する力が高まっていった、醸成されていったのかなというふうにしてお聞きしました。もう一つ全然別の確認したいことで、山賊キャンプの参加者やボランティアのスタッフの方とかのリピーター率って、どんなもんなんですか。

辻 : 子どものリピーター率はだいたい3割から4割です。口伝いに、口コミで魅力を伝えてもらうという意味では、3割から4割あるのは大きいですね。若者の方はどうしても参加できる適齢期が非常に少ないので、学生の中でも2年生ぐらいで来て、3年のときにまた来れるかっていうと苦しいとこもあります。長い子は結構2、3年続くのと、社会人になっても来てくれます。やはり良い学びを若者に提供すると、彼らが後輩に伝えてくれる動きが確実に起こるので、おそらく大学の先生にお願いしてやるよりもはるかに強い営業力になります。学生のリピーター率は年によってかなり変動はありますか。

(質問) 1点目は今回子どもの様子が見えなかったなっていうところがあって、辻さんが今までいろ

いる団体としても地域で反対があったり、経営が上手くいかなかったりってこともあったと思うんですけど、それでもやり続けようって思ったのは、何かしら子どもの変化っていうか、学びっていうか、こういう学びが大事だから続けていかなきゃならないみたいなのがあるのか、そういう体験というか、ご自身のこともかもしれないんですけど。自分が今の活動を続けているときの核になっている、子どもの変化とか、学びみたいなのがあればお聞きしてみたいです。

もう一つは、関係しないかもしれないんですけど、学生るとき社会教育ゼミは1年だけ在籍したっていう話があって、結局身体教育の方で卒論を書かれたっていうことだったんですけど、社会教育じゃなかった理由、答えられる範囲で、もし関係することがあれば聞かせていただきたいと思いました。辻：NPOのミッションは「自律のひとづくり」です。他人ときちんと協調して、責任ある行動を自らとる人を育てるとというのがミッションです。そのときに、自分として大事にしていることがあって、どんな学力をつけさせるのかっていうことです。

例えば山村留学のこどもが、五右衛門風呂を毎日焚きます。4月は3時間、4時間もかかって泣きながらやっています。今はもう30分かからないで。薪だけで温度調節も全部自分たちでできます。水しか出ませんから、前の子がお湯を使ったら、次の人のために焚かなければならない。そういうときに培った力というのは、もちろん燃焼という知識、つまり酸素と熱がということも身につきます。ですが、次の人のことを考える力も培われているはずで、それは学力と表現して良いと思います。

来年の4月から来る子どものために、今の子どもが薪を割っています。なぜなら今年の子どもは昨年の子どもたちが割ってくれた薪を使って、最初の4月を過ごしたからです。これは地域が持つてる、実は長いスパンで物事を考えていくという風土がこういうことを可能にさせています。ここで培われる力も、もちろん薪割りつまり動作科学的な運動の力、そして水稻栽培の技術などの理科学的な力もつきます。それと同時に、段取りをとる力とか、一年間を通して考える力がつきます。これも学力と表現していい。困ったときはお互い様で、みんなで力をあわせるということも、お互い様力などと言われるけど、学力と表現すればよいと思っています。

自分の受験のためや、他人より1点でも多く、周りを蹴落としてなど、そういう中で培った学力を「所有の学力」と呼んでいます。もちろんこれはこれで大事です。でもその「所有の学力」だけで、本当に世のため人のための力を発揮できるのかと思っています。その頭脳と体力は何のために使うかが大事であって、その視点を伴った学力を「関係性の学力」（岩川 2001）と呼んでいます（岩川は「関係を生きる学力」と表現）。いくら頭良くて、官僚が接待しちやだめだよ。いくら頭いい人でも国民に嘘ついちやだめだよ。いくら体力があっても、奥さんを9階から落としちやだめだよ。暴力で、ドメスティックバイオレンスに使っちゃだめだよ。その頭脳と体力をどう世のため人のために使うかということを考える場とか、教える仕組みが必要なんだと思います。僕は関係性の学力とは、所有の学力をもつて豊かに使う力だろうと思います。地域とか自然との教育活動というのは関係性の学力を豊かにする。面倒臭いことを手間暇をかけながら学ぶ力は、今どこで教えるんだと思うか

ら、ここで教えるんですと。ここには力をかけ続けなければならないです。多分今の日本社会だと、永遠にこれは頑張んなきゃだめだなと思っているところです。

最後は私の体育の話です。運動部、体育会ハンドボールをやっていました。当時強くて、主将もやっていました。勉強できなくて、やってることを卒論で書くしかなかったってということです。よく言えば運動を学問にしたってというだけの話です。体育方法論という研究室でした。どちらかというと、できない子たちのために考える教え方を模索してる研究室でした。体育嫌いがなぜ生じるんだろうという問いから、より遠く、より速く、より高くという評価基準で決まったらそりゃ運動できない子はやる気なくすよねと。そうじゃなくて、身体を動かす喜びがちゃんと伝われば、それが評価の基準になるような。速く走らなくても走る楽しさをちゃんと伝えられたらそれが体育なんだという立場に立ち、教え方や教材を考える。私的にはすごくじっくりいったのは、できる子のための教育の方に寄った考え方じゃなくて、できない子つまり弱者の方に寄り添うやり方を土台としてたということです。

でも僕は、体育会の主将でした。体育館に行くと、1年生、2年生相手に「バカヤロー！！」とか言ってるわけ。「なんでおめえできねえんだよ」とか言ってね。だけど研究室に来ると、できない子のことを考える分野をやる。スポーツ至上主義、勝利至上主義とは違う体育とか、身体の学びというのを頑張ったおかげで、こういう地域で小さな山村を舞台に頑張れているのかな。手間暇かけた効率的じゃない学びをやる土台をつくっていただいたんだろうなと思って感謝しています。決して社会教育ゼミ室が嫌で辞めたわけではありません（笑）本当は両方やりたかったのですが、さすがに身体が二つというのはできなくて。

（質問）先ほどの子ども自身にとっての価値だったり、学びだったりみたいなのにかかわって、私が修士のときのフィールドにしていたのが同じような村で、施設の子どもたちが定期的に往来をして、非日常的な体験というよりも、その村の日常の暮らしに入っていくというような実践だったんですが、施設だとやっぱり自立って問題が絡んできて「自立に何の意味があるの？」と問われたりします。もしくはそういった実践自体が「子どもにとって本当に意味あるの？」みたいなこととかを訊かれ、それは書き上げたあととかもずっと悩んでることなんですけど、実践されてる側では、何かを子どもたちは得ているし、きっとすごく力になっているんだっていうことは実感としてはあると思うんですね。そういった自立観だったり、自立ということ自体を、価値自体を覆していくような価値が作られていかないと、お金を稼ぐとか、自分で食べてくみたいなこととかに偏重していく。それは仕方ないことではありながらも、もっと基本的な安心感や暮らしの中で大人になっていく、人間が形成されていくことの価値自体を変えていくっていうようなことが必要だと思ってるんです。修論で投げかけられた質問をそのまますると、そういった子たちは結局都市に帰るので、アーバンで生きていかなきゃいけない中で、それは何の意味があるのか、グリーンウッドさんだとどういうふうにお答えになるのかなってことが気になったんですが。

辻：このだいだらぼっちには、いろんな子どもがいます。ここを目指して来てる子もいれば、いろんな事情で逃れて来てる子もいます。ここでは多数決をとりません。今年19人いますが、10対9で意見が分かれたら、普通は多数決をしますね。多数決は悪くないのですが、子どもたちの学び方が脆弱です。ここに来るまでの多数決では「9の負け」になる。「10の勝ちと」にも。9の意見を抹殺します。みんなで考えるということを捨ててみんなで進もうとするという感覚がものすごく強く、それはだめって話をしています。そういう風土はこの村にない。9という少数の意見を多数に生かしながら折り合いをつけるのが民主主義ですよ。

だから結論出ない話し合いが多い。それでも、それを繰り返していきます。時間がかかりますが、人を認める、理解する、支えるということが、どういうことかが分かってくるようです。認められることも分かってきます。最後まで自分の意見を大事にしてもらえる、その安心感が生まれることがすごく大事で、それがみんなで生きてくということなんだろうと思います。自立って自分ですべてやっていくことじゃなくて、僕は律する方を使うけど、みんなで協調しながら、でもみんなで考えて誰かのせいにしないということだと思います。それが安心感から芽生えてくるんだと思います。よく言われるのが、すごいなんでもできる子が集まって「だいだらぼっち」を形成しているんじゃないかと。スーパーマンが集まって。全然違ってまして、すぐ人のせいにするし、楽な仕事探そうとするしですね、逃げ出そうとするしみたいな子が多いわけです。でもそんな弱い子であっても、みんなで認め合ったり、支え合ったりする中で、みんなで少しずつ強くなるっていうか、成長していく。個々の能力であなたが強くなるのが自立ではなくて、みんなで自立していくということを大事にしています。

もうひとつは僕の夢の話です。先ほどの需要と供給の話にももってくかもしれませんが、泰阜村の子どもを違う地域に留学させたい。都市部の子どもをうちの村で良い教育をするというようなことから脱却して。泰阜村から5人、1人、中頓別1人、白川1人、与論1人、国頭1人、東峰とか、一斉に一年間の交換留学です。常に違う地域の子どものことがになります。これを政策的にやっっていこうと思います。義務教育9年間のうちに、行きたいという子がいたら行政がサポートする。山村留学ということからの脱却です。だから都市部の子どもたちだけではなく、自分たちで地域同士が連携して、学びをオープンにしていこうというやり方です。だから、都市部にできない学びを我々がやるとかいう考え方からはもう脱却してるかもしれないですね（笑）。それぞれが違う地域に行って学ぼうと。

実は泰阜村と、鹿児島県与論町が今、もう締結に向かって進んでいて、来年度の予算も計上して、いったん試験的にやります。子どもを交換した次は役場スタッフの交換とか、NPOとか、学校の先生の交換とか、地域全体でオールジャパンで子ども育てよう、オールジャパンで人を育てようっていう構想です。国に話しても全然相手にされないから、いいんです。国とはつきあわなくていい。地域からの教育改革を起こします。当然その先に見てるのはアジアです。アジアの子どもたちにやっっていこうかなと。だから、そういう意味で言うと、山村留学とかいうカテゴリーに僕たちは入らないのか

もしれないです。でも、そうやって学びというのをどんなふうに捉えるのかって言ったときに、まさに価値観を壊すような価値観を作り上げるという意味でいうと、小さな地域同士で支え合う仕組みも良いのかなと考えてますね。

まとめ：今日のお話を通して、若者が戻って来る、じゃあその泰阜村にどういう社会を展望してるのかを考えねばならないと思いました。今までになかった社会構想というか、新しい社会の姿・生き方がありそうだという期待の内実は、デモクラシー、民主主義と言えばそれまでですが、自分たちの暮らしの基盤を自分たちで作っていく、人の手に委ねない、なおかつその時に一人一人の尊厳を大切にしながら、お互いが自由に生きられるように、自己決定の自由度を高められるようにみんなで協力していくことであり、そのためには手間もかけてやって行かねばならないけれども、そういう面倒臭い民主主義がこれからの社会の中で大事であり、そこに生きる手応えを感じられる社会のあり方が見いだせるという直感が若者たちにあるような気がします。それは我々が教育と社会、個人と社会の関係性を考えるときでも一番問われる問題です。教育学の立場から考えていかななくてはならない問題だと改めて思いました。辻さん、本当に今日はありがとうございました。

<参考文献>

岩川直樹・汐見稔幸 『「学力」を問う—だれにとってのだれが語る「学力」か』草土文化、2001